

# 論証的局面・準ブロックとディスコース

— 規範的偏向問題の解決をめざして —

大久保 朝 憲

はじめに

本稿は、のぞましさの評価にかかわる語とその否定がどのような意味をもつものとして記述できるかという問題について、わたしたちがおこなってきた論証意味論 *Sémantique argumentative* 的観点からの記述に、これまで援用してこなかった「準ブロック *quasi-bloc*」の概念をとり入れた分析をこころみる。これによって、あとにみる「規範的偏向」の問題にも一応の解決策がみいだされ、一連の研究（大久保（2016, 2018, 2020, 2022）など）に決着をつけるみちすじをみいだそうというのが本稿の目的である。

## 1. これまでの研究

一般に、のぞましさの評価にかかわる語のなかで、*beau*, *intelligent* など、これまでわたしたちが「優位評価述語」とよんできた語には、その意味的ふるまい、とりわけそれが否定におかれた際に「規範的偏向」とよぶ現象が生じることを指摘し、その意味論的記述をこころみてきた。

(1) - Ta chambre d'hôtel, comment c'était ?

- a. - Ça va, elle était *propre*.
- b. - Elle n'était pas *propre*.
- c. - Elle était *sale*. C'était insupportable.
- d. - Bof, elle n'était pas *sale*.

「優位評価述語」とは、その発話がひろい意味で価値判断をおこなう発話であるとき、その評価を「優位」の、つまりよい評価にする語のことで、上記 (1a-b) で使用されている *propre* がこれにあたる。また、(1c-d) で使用されている *sale* のように、価値判断をおこなう発話で、その評価を「劣位」つまりわるい評価にする語を「劣位評価述語」とする。以上をふまえたうえで、(1a) の優位評価述語の否定として (1b)、(1c) の劣位評価述語の否定として (1d) をとらえたとき、このような極性の転換による解釈の変化のしかたに関して、優位評価述語には「規範的偏向」とよぶ傾向が観察される。

- (2) a. ? Ma chambre d'hôtel n'était pas *propre*, mais elle n'était pas *sale* non plus.  
 b. Ma chambre d'hôtel n'était pas *sale*, mais elle n'était pas *propre* non plus.  
 c. Ma chambre d'hôtel n'était pas *grande*, mais elle n'était pas *petite* non plus.  
 d. Ma chambre d'hôtel n'était pas *petite*, mais elle n'était pas *grande* non plus.

上記 (2) について、まず後半の例文 (2c-d) から考察する。grand, petit という形容詞は、述語としては「中立的評価述語」として評価的発話を構成する。「中立的評価述語」とは、評価的発話の述語でありつつ、それ自体の語彙的意味によって価値判断にかかわることがない述語のことである。たしかに、grand / petit のペアでは、しばしば「おおきいことはいいことだ」という通念によって grand は優位評価述語、petit は劣位評価述語ととらえられがちであるが、実際にはその判断は、「なにがおおきいのか」に左右される。ホテルの部屋がおおきいことは、おおくのばあいよるこぼしいが、事故でおったきずぐちがおおきいことは、よろしくない事実である。さて、その (2c-d) では、grand, petit がともに否定におか

れている。その否定によって「わたしのホテルのへや」は、(2c) ではおおきくもなければちいさくもない、同様に (2d) ではちいさくもなければおおきくもないと評価されている。(2c) で、「おおきくない pas grand」ことは論理的には「ちいさい」ことを含意するが、ここでは、後続する節によってその解釈はふせがれ、へやの寸法について、「おおきくもちいさくもない」評価がなされていると理解される。(2d) についても事情は同様である。したがって、当然のことだが、grand / petit のように程度をあらわす形容詞による中立的評価述語の否定は、ただちにその反意語の意味になることはない。

これに対して、優位・劣位評価述語である propre / sale をふくむ発話では事情が異なる。sale をふくむ (2b) では「不潔ではないが清潔でもない」、いわば「そこそこ moyen」の状態としてへやの清潔さを感じられていると解釈できるが、優位評価述語 propre を述語とする (2a) について、「清潔ではないが不潔でもない」と解釈するのは困難である。これは propre の否定 pas propre の意味する範囲が、中立的評価述語がそうであるように「清潔ではないが不潔とまではいえない」中間的な状況をとびこえて、一気に「不潔」の意味をもってしまうことで、(2a) の発話の mais をはさむ前件と後件に、矛盾にちかいものを感じさせられるからである。この現象がおこるのは、すでにのべたように優位評価述語においてのみであることから、わたしたちはこれを「規範的偏向」となづけて分析をおこなってきた。ところが、例文群 (2) をよくよくみると、規範的偏向を記述するための説明に矛盾を感じざるをえない部分があることに気づく。優位評価述語の否定 pas propre の意味が sale にちかいものになるとするなら、矛盾を感じるのは (2a) の発話だけではなく、後件に pas propre をふくむ (2b) も同断であるはずだ。この問題については、大久保 (2022) では簡単に、(2a) 前件の否定発話と (2b) 後件の否定発話は、ともに同一の文 elle n'était pas propre の実現でありながら、否定の発話としての実現のしかたにちがいがあり、(2a) では記述的否定、(2b) では論争的否定の発話として実現していることによると説明した。記述的否定 négation

descriptive とは、否定が、肯定命題による発話を否定して反論しようとするために否定辞が使用されるのではなく、否定辞もふくめた述語全体が、事態の記述をおこなうばあいのことで、成句化している例もすくなくない。これに対して論争的否定 *négation polémique* とは、典型的には先行する肯定の発話をとりけして反論をおこなうために、その標識として否定辞が使用されるものである。(2a) は、へやの状態を質問されて、*Elle n'était pas propre* でその記述をはじめが、そのばあいの述語の意味に規範的偏向がかり、*sale* にちかづくことで後件 *pas sale* と齟齬をきたしてしまう。これに対して (2b) では、前件で *pas sale* と記述されるが、*sale* のような劣位評価述語は、規範的偏向をもたらないので、*pas sale* からは、*propre* といえるまでのさまざまな段階の清潔さ・不潔さどあいが想定され、そのなかには、*pas sale, c'est-à-dire propre* もふくまれる。そこでこれを否定によってしりぞけようとするのが後件の *pas propre* の発話レベルのやくわりで、発話全体としては、「へやは不潔ではなかったが、だからといって清潔ともいえなかった」とでも解釈できるようなものとなっている。ここでの後件の *pas propre* は、度をあらかず形容詞の否定によって清潔さ・不潔さのなんらかのどあいをさしめそうとしているのではなく、「(*pas sale* といったことで *propre* とおもうかもしれないがそれはない) という反論の発話を構成しているにすぎない」というのが、大久保 (2022) 段階での説明だった。

以下、本稿では、いまみた否定の発話の2つのタイプを、論証意味論のわくぐみでどのようにとらえなおすことができるかという点を中心に検討する。

## 2. 意味ブロック理論の基本的な概念、とりわけ「準ブロック」について

論証意味論の基本的なかんがえかたについては、その概略を大久保 (2022) で説明したので、本稿では、これをなぞりながら、大久保 (ibid.) ではふれなかった「準ブロック *quasi-bloc*」の概念について論じたい。

論証意味論 *Sémantique argumentative* とは、言語 (単語・文・発話) の

意味記述を、それに対応する論証（これ自体も言語的実体）によってしめそうとするかんがえかたで、「言語内論証理論」(Anscombe & Ducrot 1983)、「トポス理論」(Anscombe 1995)といった理論的変遷をへて、「意味ブロック理論 (TBS)」(Carel 2011) に結実した。現在では、Carel (ibid.) による意味ブロック理論の体系はさらに修正をうけ、用語法なども更新されることで、より精緻化がすすんでおり、当初の理論を「TBS 標準理論」とよんで区別することもおこなわれている。論証意味論のこうした変遷は、言語の非指示性の急進化とよみかえることができる。これはすなわち、言語の意味記述に、それが参照するものとして、言語そのもの以外の対象世界を一切介入させないという姿勢の徹底化である。本稿もこのアプローチにならい、言語現象を、可能なかぎり言語そのものによって記述することをめざしている。

## 2.1. 意味内容と意味について

言語の意味について、ある言語表現がラングの一要素としてもつ「意味内容 signification」と、それが具体的な発話で使用される際にもつ「意味 sens」の2つに区別することが一般的である。この区別について、Carel (2017 : 3) は以下のように論じる。

「表現 expression」とは、単一の語 (loup, lire)、複合的な語 (un loup féroce, lire un article)、あるいは文法的な一節 (Un loup féroce est entré dans la cour, j'ai lu son article) などのことである。すべての表現は、このようにして、ある意味論的価値を付与されるという属性を共有している。ラングが、ある使用されていない表現にむすびつけた価値のことを「意味内容 signification」、その表現が使用されるときに生じる価値を「意味 sens」とよぶことにする<sup>1)</sup>。」

1) 例をみれば一目瞭然だが、ここで「単一の語 un terme simple」「複合的な語 un terme complex」「文法的な一節 une suite grammaticale」という特殊な分類について補足す

このように「意味内容」と「意味」を区別することはめずらしくないが、「使用されていない表現」とはなにか、使用されていない表現の意味内容と使用されるものの意味とのあいだにはどんな関係があるのかといった疑問をなげかけたとたんに言語学者の見解はさまざまにわかる。これについての Carel (ibid : 4) による Ducrot の見解は以下のようなものである。

言語学者の使命は、使用された表現を説明することである。使用されない表現などというのは、使用された言語を理解するための理論的構築物であるにすぎない。使用されない表現の意味内容とは、文脈がしられることによって使用された表現の意味を予想するための単なる道具でしかない。

そして、以下のようにつづける。

「使用されていない表現」、「意味内容」という概念についてのわたしの理解は Ducrot にならったものである。意味内容とは、わたしにとっては発話の意味を予想できるようにする要素によって構成されている。

そのうえで、ブロック意味論は言語内論証理論のたちばを急進化し、「使用されていない表現の意味内容は、ただ論証的指令のみによってなりたっているというかんがえを支持する」(ibid. 5) としている。

ある語の「意味内容」を、使用されていないときにその語がもつ意味的価値にとらえ、「意味」が、使用における意味的価値であるということをも以上のようにとらえたうえで、ブロック意味論では「予示する préfigurer」という動詞も使用する。Carel (2021) にそって、この術語の意味も確認

---

る。「単一の語」とは一語単位の語、「複合的な語」とはいわゆる複合語に限らず、複数の語がひとまとまりの意味をあらわし、文法的な「文」にならないすべてのレベルのものということで、典型的には「句 syntagme」レベルのもののものである。

しておこう。Carel (ibid : 125) には以下のような記述がある。

意味 *le sens* とは、ある使用から別の使用にうつるごとに変化する可能性がたしかにある。意味は意味内容 *la signification* によって部分的に予測できるものではあるが、部分的ということにとどまる。わたしたちはそのとき、意味は、その語の意味内容によって「予示される」ということにしよう。

「予示」の具体的なはたらきについて、Carel (ibid.) は、TRAVAILLER と RÉUSSIR の語の論証意味論的特徴の記述によって説明している。この2つの語は、以下の4つの論証的局面 *aspect argumentatif* によって1つの意味ブロックを形成しているということができる。

- (3) TRAVAILLER DC RÉUSSIR  
 TRAVAILLER PT NEG RÉUSSIR  
 NEG TRAVAILLER DC NEG RÉUSSIR  
 NEG TRAVAILLER PT RÉUSSIR

「論証的局面 *aspect argumentatif*」とは、単語や発話の意味を論証的に記述するための、いわばメタ言語で、実際の具体的な発話パターンにつけたラベルととらえてもよいものである。たとえば、上記1つめの論証的局面には、以下のような発話が属することになる。

- (4) a. Marie a beaucoup travaillé pour ce concours, donc elle l'a réussi.  
 b. Tu sais pourquoi il a réussi dans ses affaires ? C'est simple, il a travaillé énormément.

これらは論証的局面が実際の発話として実現したものであり、これをTBSでは「論証的連鎖 *aspect argumentatif*」という。

(3) にまとめられた4つの論証的側面がひとつの意味ブロックとなることについて説明する。これら4つの論証的側面は、実際にはさまざまな発話（論証的連鎖）として実現するが、それぞれの側面で、TRAVAILLER, RÉUSSIR はおなじ論証の意味で使用される。勉強すること、はたらくことは、それによって成功することとむすびつき、(3)の4つの局面が意味する TRAVAILLER, RÉUSSIR はすべてその意味で使用される。このことは、TRAVAILLER, RÉUSSIR が、それぞれ別の論証的局面を形成しうることからも理解される。1例だけみておこう。

(5) Marie a beaucoup travaillé, donc elle est très fatiguée.

この発話は、TRAVAILLER DC FATIGUÉ と表現できる論証的局面の具体化といえるもので、実際の発話が(4a)と一字一句おなじでも、TRAVAILLERの意味はまったくちがっている。論証的局面 TRAVAILLER DC FATIGUÉ は、ほかに以下の3つの論証的局面とむすびついて、(3)とは別の意味ブロックを形成するのだ。

(6) TRAVAILLER DC FATIGUÉ

TRAVAILLER PT NEG FATIGUÉ

NEG TRAVAILLER DC NEG FATIGUÉ

NEG TRAVAILLER PT FATIGUÉ

さて、準ブロックの説明にいたる Carel (2021) の議論にもどろう。(3)の意味ブロックを構成する4つの論証的局面をさらに観察すると、前2者どうしが、ひときわつよい親和性をもつとかんがえられる。両者はともに、動詞 travailler の意味内容中に予示されており、travail という観念についての2つの側面となっていて、それぞれ、通常ならば成功 réussir につながって (TRAVAILLER DC RÉUSSIR) をみちびくか、失敗をさけられなければ (TRAVAILLER PT NEG RÉUSSIR) をみちびく。このような



ばあいには、TRAVAILLER DC RÉUSSIR と TRAVAILLER PT NEG RÉUSSIR は「おなじ準ブロックを共有している」といういかたをすることにし、これを以下のように表記する。

### TRAVAILLER (RÉUSSIR)

後件の RÉUSSIR が括弧にいれられているのは、この語は TRAVAILLER DC RÉUSSIR では肯定形に、TRAVAILLER PT NEG RÉUSSIR では否定形におかれてあらわれるからである。

(6) の後二者の論証的局面 NEG TRAVAILLER DC NEG RÉUSSIR と NEG TRAVAILLER PT RÉUSSIR もまた、たがいにつよむすびついでおり、そのむすびつきは、別の準ブロック NEG TRAVAILLER (NEG RÉUSSIR) に由来するものである。これらの局面は、ne pas travailler という語句の意味内容中に予示されている。

意味ブロックを構成する 4 つの論証的局面を図式的に表示するために、大久保 (2022) では TBS 標準理論で比較よく利用されていた論証矩形 carré argumentatif を利用したが、本稿では、準ブロックの概念をあとの分析で援用することも考慮し、Carel (2022) ににらみ、TRAVAILLER (RÉUSSIR) の意味ブロックを樹形図のかたちで図 1 のようにしめす。

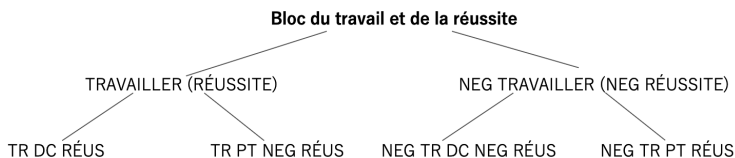


図 1<sup>2)</sup>

2) Carel (2022 : 126) による。最下列の 4 つの論証的局面では、TRAVAILLER → TR、RÉUSSIR → RÉUS と略表記した。

この図式化によって意味ブロック（最上段）、準ブロック（中段）、そして1つの意味ブロックに属する4つの論証の側面の階層関係が視覚化され、この順番に各概念層が、抽象度のたかいものからひくい（具体的な）ものへと移行してゆく。図1には煩雑さをさけるためにふくめなかったが、最下段のそれぞれの論証の側面のしたに、具体的に実現した発話がある（例文（4）参照）。また、おなじ準ブロックに属する局面どうしは converse 関係<sup>3)</sup>にある。

## 2.2. 準ブロックの定義

準ブロックの定義について、ふたたび Carel (2022) の議論を要約する。ひとつのおなじ意味ブロックはペアにわけることができて、それぞれひとつずつの規範的側面と違反的側面をふくみもっている。「converse 関係の準ブロック」というとき、それは2つの converse 関係にある局面が共有しているものを構成し、2つの局面のそれぞれが、準ブロックを「特定化する spécifier」といういいかたをする。局面は準ブロックの「特定化 spécification」を構成し、おなじ意味ブロックが、converse 関係にある2つの準ブロックの出現のもととなる。そのとき両者は「相補的 complémentaire」であるといわれる。以上のことを図1におぎなったものが図2である。

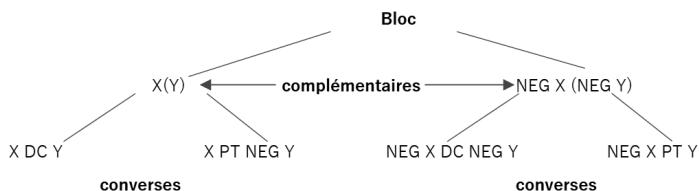


図2

3) 2つの論証の局面が意味的に対立するとき、TBSでは、その論証意味論的対立のしかたに応じて、converses, transposes, réciproques と区別している。その詳細につ

この準ブロックが *converse* 関係ではなく、*transposé* 関係のものについては、以下のような樹形図がその図式となる。

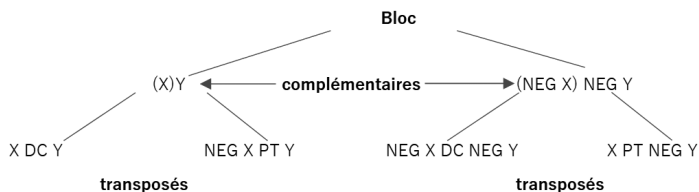


図 3

同様に、*réciroque* 関係のペアリングによっても準ブロックは記述可能で、TBS では、ある語の意味内容は、論証的側面と準ブロックからなりたつという仮説をおしすすめている。

### 3. 準ブロックの概念をとりいれた規範的偏向の記述のこころみ

#### 3.1. 優位評価述語の否定の意味記述の修正

大久保（2022）では、規範的偏向の現象が生じる優位評価述語の否定について論証的矩形を援用して、以下のような論証意味論的記述をこころみた。しかしそこでは「論証的局面」と「論証的連鎖」を混同するという誤謬により、*pas gentil* の意味のつりあげがおこり、これが論証的矩形内で *méchant* とおなじ配置となるというまちがった主張がおこなわれている。そこで、単語 *gentil* / *méchant* によって具体化される論証的局面を、あらためて記述しなおしてみよう。

---

いては大久保（2022）で紙幅のゆるす範囲で詳述した。

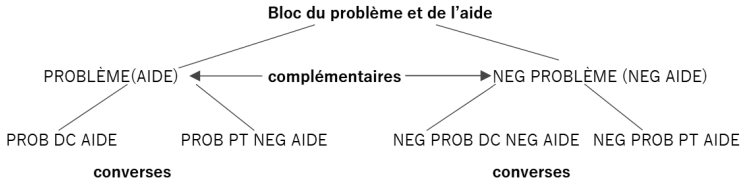


図 4

- (7) PROBLÈME DC AIDE → pas méchant  
 PROBLÈME PT NEG AIDE → méchant  
 NEG PROBLÈME DC NEG AIDE → (pas gentil)  
 NEG PROBLÈME PT AIDE → gentil

やじるしの左側が、右側の単語の論証的局面となっていることは、いまや一目瞭然である。3行めの局面が pas gentil として具体化しにくいことについて、本稿としては以下のように立論する。ひとつの論証的局面によって具体化される論証的連鎖がひとつとおりでないことは、すでにのべたとおりである。BEAU TEMPS DC SORTIE という論証的局面については「Il fait beau, alors on va sortir.」以外にも、「Il fait un temps magnifique, pourquoi pas nous promener?」や、ばあいによっては、「Le temps n'est pas mauvais pour marcher jusque-là」など、ほかにもさまざまな語や文がこの局面を具体化している。このことと同様に、PROBLÈME PT NEG AIDE を具体化する論証的連鎖のなかに、pas gentil がはいつていても問題はない。実際に、後半を méchant の論証的側面の具体化とした下記 (8) はごく自然なディスコースである。

- (8) Il n'est pas gentil : alors qu'il a vu quelqu'un en difficulté, il ne voulait pas l'aider.

ただし、大久保 (2022) でも言及し、本稿でもすでにふれたように、

連鎖 *pas gentil* が (7) の 3 行めの論証的局面に適合するケースがないわけではない。

(9) A : Il est gentil, ce garçon : il m'a aidée quand j'étais en difficulté.

B : Non, non, *il n'est pas gentil* : s'il t'a aidée quand tu étais en difficulté, il ne fait jamais rien quand tout va bien. Il n'est donc pas méchant, ni gentil.

いささか人工的であるが、上記の作例 (9) がわかりやすい説明になるだろう。まず 2 行めの B による *il n'est pas gentil* (斜体字部分) はあきらかに論争的否定で、主語についてなにか記述することよりも、あいての主張に反意をしめすことが主眼である。また、単語 *gentil* の意味内容を構成する論証的局面 NEG PROBLÈME PT AIDE に対し、その否定 *pas gentil* の論証的局面は、これと *converse* 関係をむすぶ NEG PROBLÈME DC NEG AIDE となる。つまり、PROBLÈME と AIDE に関する意味ブロックに関して、*gentil* と *pas gentil* は、*converse* 関係による準ブロック PROBLÈME (AIDE) および NEG PROBLÈME (NEG AIDE) をもたらし (図 4 参照)、これが (9) の会話のやりとりをささえている。大久保 (2022) でもみたように、*converse* 関係による、すなわちコネクタと後件の極性を転換し、前件はそのままという関係にある準ブロックは、対立関係がわかりやすく、反論的否定にもなじみやすい。B は、その反論的否定につづけて、*s'il t'a aidée quand tu étais en difficulté* と条件文の前件を提示するが、これは、そのものが *pas méchant* の論証的局面 PROBLÈME DC AIDE を具体化した論証的連鎖である。そして、このおなじ条件文の後件 *il ne fait jamais rien quand tout va bien* は、(7) の 3 行めの論証的局面 NEG PROBLÈME DC NEG AIDE を具体化した論証的連鎖であるが、これまで議論してきたように、この局面を意味内容としてもっている語はみつけることができない。ここで (9) のディスコースでは論争的否定として *pas gentil* が使用されることで、当該人物が *méchant* でもなければ

gentilでもない、どちらかというとはっとしないひと、という内容をつたえている。このようなディスコース内では、méchantのほうに「意味のつりあげ」がおこらないかたちで、pas gentilを使用することが可能になる。

さて、それでは、NEG PROBLÈME DC NEG AIDEを具体化する論証的連鎖が「ない」とはどういう意味なのか、また、否定の種類によってpas gentilの意味が変化するとはどういうことかをみてゆこう。

### 3.2. 語彙の非網羅性と論証的局面の具体化における逸脱

前項でみたように、pas gentilの意味は、論証的局面：PROBLÈME PT NEG AIDEの具体化であるとするが、この論証的局面の具体化の典型はそもそも語méchantである。これについてすくなくとも2つの問いにこたえなければならない。ひとつめは、論証的局面NEG PROBLÈME DC NEG AIDEを具体化する言語表現（語（句））はないのかという問いであり、もうひとつは、おなじ論証的局面を具体化する言語表現pas gentilとméchantは、それでは同義語になるのかという問いである。端的には、最初の問いについては、そのようなフランス語の表現を、ここで問題にしている意味ブロック内でみつけることはできないが、そのことは問題にならないということ、つぎの問いについては、Carel (2017) で提案される「逸脱 décalage」の概念によって、両者が同義語ではないということたえがみちびかれる。準に論じてゆこう。

#### 3.2.1. 語彙の非網羅性

gentil / méchantによって形成される意味ブロックは2つの準ブロックと4つの論証的局面によって記述しきれそうなところで、pas gentilが、méchantとおなじ論証的局面の具体化であるとみなさざるをえないために、NEG PROBLÈME DC NEG AIDEという一種の「あきスロット」をのこしてしまうことになった。しかしこのことは、フランス語という言葉

語の現状がそうである、ということ以上のことではなく、問題にすべきことにあたらないとわたしたちはかんがえる。ラングを構成する語彙が、このようなすきまをもつことは、それほどめずらしいことではなく、たとえば、よく知られているように、形容詞 *profond* には、「あさい」という意味の反意語がない。このように、ある言語を構成する語彙は、ときにこのような非網羅性という性質をみせることがあるが、これをわたしたちはそこに非網羅性があると観察するにとどめるしかないとかんがえる。もちろん、問題の論証的局面 NEG PROBLÈME DC NEG AIDE は、*nonchalant*, *inattentif* などの形容詞も想起させるものであり、将来フランス語の単語の意味記述がすすんで、そちらの意味記述にこそふさわしい論証的局面となるかもしれないが、その際は、適宜修正をほどこせばよく、それを理由に、TBS がおおきな理論的問題をかかえるとは、いまのところはかんがえる必要はないというのが、現状についてのわたしたちの見解である。

ただ、それでも問題のスロットには、空白をうめるべく *[pas gentil]* という具体的出力の可能性をのこしておく必要がある。それは、これまで随所で論じてきたように、*pas gentil* が PROBLÈME PT NEG AIDE の具体化になるのは、あくまでも、記述的否定の発話の述語であるばあいのみであって、反論的否定の発話の述語となるばあいは、もとにある論証的局面を NEG PROBLÈME DC NEG AIDE とみなしてよいじゅうぶんな理由があるからである。さらにいえば、*pas gentil* の本来の論証的局面は、やはり NEG PROBLÈME DC NEG AIDE であって、*méchant* にちかづく *pas gentil* は、さきにものべたように、記述的否定から派生した成句的な表現であると判断できる。

否定とはそもそもが「反論」であることは Ducrot (1984) でも論じられている。反論、つまり聞き手や通説のまちがいをただそうとするため、という意味がこめられていないかぎり、「～ではない」という論述の内容は、その意味がかかるすぎる。しかし、否定の発話のなかには、そもそも反論の意味で使用されながら、ある種成句のように独自の、より積極的

な意味をもつとか、その他の理由があって、なかば独立した述語として使用されるようになるケースもまためずらしくない。Ducrot (ibid.) では「*« il n'y a pas un nuage au ciel. »*」という否定の発話が例としてあげられており、この発話が、「雲がある」という先行の発話や文脈上に想定されたことへの反論としてではなく、「快晴である」ことを積極的に記述するためだけに使用されるようになって、述語として成句化したものであると説明している。このことは、本稿が分析の対象としている優位評価述語の否定をふくむすべての発話にいえることである。「*« Pierre n'est pas gentil »*」という発話は、おおくのばあい「*« Pierre est gentil »*」に対する反論ではなく、ピエールがどんなひとかを記述するための表現のひとつとなっている。そして、それがおおくのばあいに「*« Pierre est méchant »*」のほうにちかづくことには、それなりの理由がある。次項で詳説する。

### 3.2.2. 逸脱

Carel (2017 : 11-14) は、論証的局面的具体化としての実際の発話（論証的連鎖）が、局面に語をのせていくことによって、いかにディスコースをゆたかなものにするか、その際、「逸脱 *décalage*」がどれほど重要なやくわりをはたしうるかということを論じている。

逸脱とは、このように言語のさまざまなゆたかさのひとつを構成し、（中略）逸脱は、ある話し手が、特徴づけるための語や構成要素とするための語をまぜあわせながら、あるときは慣例的に、あるときは嘲笑的にわたしたちのまえにたちあらわれる際の視点、より正確には言語の内面化のどあい、言語のある使用のしかたをあかみにだす。（Carel ibid : 14）

論証意味論一般、特にそのもっとも急進的な発展形である意味ブロック理論（TBS）をふかくしるにつけて、おなじ言語共同体に属する人間の共有物としての言語＝ラングが、論証的局面に代表される非常に嚴格



な規則にしたがっており、ひとは、たとえば本稿の作例のようなあじけない言語実践のみをしいられるのではないかという疑問、TBSではとてもこの言語のゆたかさを記述しきれないのではないかという疑問があたまをもたげることがあるかもしれない。これに対して Carel (ibid.) は、そうではない、むしろ TBS の提供する言語記述のわくぐみに、どのような具体的な言語要素をながしこんでやるかによって、TBS は、日常のちょっとした会話から17世紀古典悲劇にいたるまで、さまざまな言語使用の実例が、理論的わくぐみから、どのぐらい、またどのようなしかたで適合したり逸脱したりしているかを分析可能なものとする理論であることを上記引用のように強調する。

「逸脱」の概念の理論的有効性自体については、稿をあらためて論じる必要があるが、ここでは、評価述語の意味の区別をめぐる議論にあてはまる範囲で、この概念についてかんがえておきたい。

「逸脱」を理解するのにもっともわかりやすい事例のひとつが緩叙法である。極上蔵出しのワインを地下室からだしてきて、まねいた友人にこれをすすめる発話としては、たとえば「Ce vin est excellent, tu veux le goûter?」とごく単純にいうことができる。このとき、この発話は論証的局面 BON DC CONSOMMER をきわめて忠実に表現した発話事例となる。しかるに、おなじ状況で、話し手はつぎのようにいうこともできるだろう。「Ce vin n'est sans doute pas trop mauvais, tu veux en goûter un peu?」このもってまわった発話も、結局はおなじ論証的局面を具体化したものといえるが、BON を pas trop mauvais とへりくだり、どうせそれほどはのむに値しないだろうといわんばかりに、en goûter un peu とするなど、論証的局面とその具体化による論証的連鎖のあいだには、不合理ともいえる「逸脱」があることがわかる。そのとき、この逸脱にはさまざまな動機がかんがえられ、これをどのような口調で発話するにもよるが、極上蔵出しをひけらかし、わざわざ自宅のワインセラーからもちだして、あいてにふるまおうとしているという文脈で、あえて「そこまですぐよくないとおもうのだが」と逸脱することは、むしろ言語の論証性をさかて

にとつた諧謔とよむのが適切そうである。これが、Carel のいう「逸脱」の妙であるとわたしたちはかんがえたい。

以上をふまえて本稿の問題にもどろう。2つめの問いは、*pas gentil* / *méchant* がともにおなじ論証的側面の具体化であるのなら、言語表現の意味はその論証的側面であるという理論上の前提にしたがえば、両者は同義語なのではないかというものであった。これに対しての本稿のたちばからのこたえは、同義語ではなく、意味のちがいがあるということになる。おなじ論証的局面的具体化でありながら、両者それぞれが、どのぐらい忠実に論証的局面的具体化になっているかという、当然明言性のたかい *méchant* となる。*pas gentil* の意味がよくなるのは、その間接性で、これを TBS では逸脱とよび、理論内の問題としてあつかえるものとしている。いっぽう、*méchant* をさけて *pas gentil* ということによる逸脱など凡庸で、ちまたの発話にもあふれているという再反論に対しては、そのとおりであるというこたえになる。その理由は、*pas gentil* がもともとは反論的否定であり、これが逸脱として緩叙法的に使用されるうちに慣例化し、婉曲語法的な効果さえうしなってしまったとすることができるだろう。動詞述語の例になるが、*détester*, *hair* といった意味のつよすぎる表現をさけて、*pas aimer* という表現があるが、この表現に「愛してはいないがきらってもいない」という意味はもはやない。このように、逸脱はさまざまなディスコースのなかで論証的局面的にどの程度忠実な発話をするかしないかで意味をかえる。そのちがいが形骸化していても、*méchant* といわずに *pas gentil* といったり、*détester* といわずに *pas aimer* ということによる逸脱のどあいのちがいが、両者の意味のちがいを成立させており、その意味でこれらは同義語化してはいない。

おわりに

本稿では、ここ数年のうちに変化をとげた TBS の比較的あたらしい理論的概念を援用し、おもに優位評価述語の否定について、わたしたちがずっととりくんできた規範的偏向の問題についてあらためて論じた。そ

の問題の解決につながる立論を展開するなかで、わたしたちにとって懸案のひとつであった同義性の問題についても、「逸脱」の概念によってただしく分析するみちすじをしめすことができたのではないだろうか。理論的精緻化、事例の分析と記述など、解決しなければならない、また確証が必要な問題などはいまだかずおおいが、TBSが人間の言語の豊饒さをももらさず記述可能な理論であるなら、この言語理論の存在価値はおおきく、その欠点を克服し、この理論をサポートする提案ができるような研究をさらにおすすめることにおおきな意義があるとかんがえられる。

(本学教授)

#### 引用文献

- Anscombre, J.-C. (dir.) (1995), *Théorie des topoi*, Kimé, Paris.
- Anscombre, J.-C. & O. Ducrot (1983), *L'argumentation dans la langue*, Éd. Mardaga, Bruxelles-Liège-Paris.
- Behe, L, M. Carel, C. Denuc, et J.C. Machado (eds) (2021), *Cours de sémantique argumentative*, Pedro & João Editores, São Carlos.
- Bourmayan, A. (2022), « Les adjectifs axiologiquement opposés : le cas de "prudent" vs. "timoré", *Humanidades & Inovação*, Énonciation et Argumentation, 9 (4), 74-88. hal-03749318.
- Carel, M. (2011), *L'entrelacement argumentatif. Lexique, discours et blocs sémantiques*, Éditions Honoré Champion, Paris.
- Carel, M. (2017), « Signification et argumentation », publié en français et en traduction portugaise. In : UNISC, *Signo*. vol. 42, n°73, 2-20.
- Carel, M. (2021), « Préface : La Sémantique Argumentative » dans Behe, L, M. Carel, C. Denuc, et J.C. Machado (eds.).
- Delanoy, C.P, « Les relations entre aspects argumentatifs : les concepts de conversion, réciprocité et transposition », Behe, L, M. Carel, C. Denuc, J. C. Machado (eds) (2021), 101-110.
- Ducrot, O. (1973), *La prévue et le dire*, Tours, Mame.
- Ducrot, O. (1984), *Le dire et le dit*. Paris, Les éditions de minuit.
- 大久保朝憲 (2001) 「緩叙法的否定と誇張法的否定」『關西大學文學論集』51(1), 1-18.

大久保朝憲 (2016) 「評価述語の規範的偏向とアイロニー」, 『關西大學文學論集』 66 (3), 313-345.

大久保朝憲 (2018) 「語彙的評価語の否定における規範的偏向: “Barack Obama is the first black president of the US” の両義性をめぐって」, 『日本語用論学会 第20回大会発表論文集 第13号』 17-24.

大久保朝憲 (2020) 「のぞましさ述語と有利さ述語」『關西大學文學論集』 70(3), 149-175.

大久保朝憲 (2022) 「論証的意味論に基づいたのぞましさ述語の記述をめぐって」, 『仏語仏文学』 48, 17-41. 関西大学フランス語フランス文学会.